

翻訳老乞大朴通事の左側音の入声表記について

中村雅之

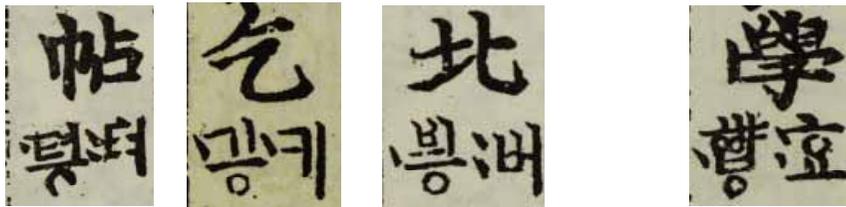
1. 老・朴における二種のハングル注音

16世紀初頭に崔世珍によって編纂された諺解本の老乞大・朴通事(いわゆる翻訳老乞大・翻訳朴通事)には、各漢字の下に二種の字音がハングルで記されている。「翻訳老乞大朴通事凡例」(四声通解所載)によれば、二種のうち左側に記された音(以下、左側音)は、申叔舟の『四声通考』に記された「俗音」を転載したものであり、右側の表記(以下、右側音)は崔世珍が採集した当時の「正音」を通常の朝鮮語表記の方法に従って記したものである。

左右二種の表記の主な違いは、次の二点に集約される。第1点:左側音では伝統的な声母の三項対立(全清音・次清音・濁音)が区別されるが、右側音では当時の北方音にしたがって、二項対立(全清音・次清音)である。第2点:旧入声韻の音形。特にその入声韻尾(らしきもの)を表記する左側音に対して、右側音では非入声韻と同様に無韻尾の表記になっている。

2. 左側音の入声表記

まず、旧入声字に対する左右二種の表記の違いを具体的に見ると、次のようである。



河野六郎方式の転写では、「帖 tie' / tie」「乞 ki' / ki」「北 byi' / be」「学 hhiav / hio」となる(声点は省略)。問題となるのは左側音に現れる韻尾の「'」と「v」である。このうち「'」の方は、ほとんどの研究者によって声門閉鎖音を表記したものと理解されている。つまり、上の左三字の左側音が示す音価としては [tʰieʔ] [kʰiʔ] [puiʔ] というわけである。「'」は影母の表記にも用いられており、影母は中古音で声門閉鎖音であったと考えられているから、韻尾の表記においても声門閉鎖音を想定するのは、ごく自然な結論とも言えるが、別の考え方も可能である。

ここでは、「'」は単に旧入声字であることを示す記号であって、何の音価も担っていないかという仮説を提出してみたい。この問題を考える際に出発点とすべきは、左側音が申叔舟の表記の転載であるという事実である。彼の『四声通考』はすでに存在しないが、その元の資料たる、申叔舟自身も編纂に参加した『洪武正韻訳訓』は見ることができる。それによれば、入声字の韻尾の表記として採用されているのは「-b」「-d」「-g」である。つまり、中古音的な三種の韻尾が「正音」として掲げられているのである。しかし当時の北方ではそのような韻尾は全くなかったために、「俗音」として注記する必要があり、その際に「'」という表記が考案された。したがって、「'」の本来の意味は、「俗音」では「-b/-d/-g」

という韻尾はない、ということであって、声門閉鎖音を積極的に表記しようとしたものではなかったと思われる。むしろ、韻尾の位置に何の音もない、という記号として「'」が選ばれたのだと私は考える。

ゼロ韻尾であるならば、右側音のように何も表記しない方がよほど明快ではないか、という疑問もあろうが、伝統的な枠組みとしての「入声」という範疇に属する字であることを示すためにはやはり「'」は必要であった。初期のハングル表記では、中国語の声調を「声点」という点によって示したが、声点には三種類しか用意されていない。すなわち左側音では、平声が無点、上声が二点、去声および入声とともに一点である。したがって、入声をゼロ韻尾とした場合、去声と入声とが区別できないことになる。そのため、入声であることを表すゼロ音価の記号として「'」が選ばれたのであろう。

「学 hhiav」のような「-v」の場合はどうか。これも音価としては「-w」の表記と同じく [-u] であると考えられる。ただ、「小 siaw」「教 giaw」と同じような表記にしたのでは入声字であることが明確でなくなるために、「学 hhiav」のように「-v」を用いたのであろう。「'」を声門閉鎖音であると考えられる研究者は、この「-v」にも [-u?] の音価を当てることが多いが、一つの文字に二つの単音を当てるのは相当に無理があるのではあるまいか。そもそも「v」で転写される文字は、声母においては [f-] を表す文字である。その文字をわざわざ韻尾に用いたのは、「-w」との平衡性を考慮してのことであろう。「w」は「m」の下に丸を付加して作られた文字であり、韻尾においては [-u] を表す。「v」も「b」の下に丸を付加した文字であり、韻尾においては同様に [-u] を表すものと考えられる。『洪武正韻訳訓』の標音において、「-m」に対応する入声韻尾が「-b」であるという関係になぞらえて、「-w」と同じ音価ではあるが、入声字であることを示すのに「-v」が適当と見なされたわけである。もとの字形を見れば分かるが、「-w」と「-v」は一見して非常によく似ている。しかもそれぞれの字形の中には「m」と「b」が含まれている。つまり、同じ音価を表すことに抵抗がなく、かつ「-v」を旧入声字と判断するのも容易である。なかなか巧妙な表記と云うべきであろう。

### 3. 俗音としての左側音

すでに述べたように、左側音の表記の特徴は、形式的な表記として「濁音声母」と「入声韻尾」を持っていることであるが、それらは伝統的な音韻カテゴリーを守っただけのことで、実質を伴っていたとは見なしがたい。前節に述べた仮説が受け入れられるとすれば、「学 hhiav」という表記が実際には [hiau] を意図したものであると考えることに何の支障もなくなる。そのように考えてこそ、左側音の示す音形が「翻訳老乞大朴通事凡例」において「俗音」と明言されていることが納得できるのである。左側音に記された入声韻の音形は、現代北京音の白話音とほぼ同じものであり、正に当時の北方の俗音を記したものと理解される。